令和三年四月十日発行
皇學館論叢第五十四巻第一号　抜刷

伝統工芸における陶法技術の伝承について

――四日市のやきもの、萬古焼――

岡村奉一郎

皇學館論叢　第五十四巻第一号
令和三年四月十日

伝統工芸における陶法技術の伝承について

――四日市のやきもの、萬古焼――

岡村奉一郎

□要旨

現在三重県四日市市で「四日市萬古焼」は、経済産業大臣指定の伝統的工芸品という地域文化的な立場をみせながらも、人々の生業として地域の経済を支えている。文化の面でも産業の面でも北伊勢地域の顔ともいえる、この四日市のやきものは何時、どのように始まり、どういった地政的要因によって最終的に四日市萬古焼となったのであろうか。

四日市萬古焼は、江戸中期元文年間（一七三六～四一）に桑名で萬古焼を創製した沼波弄山、江戸後期文政年間（一八一八～二九）に同じく桑名で萬古焼を再興した森与一郎、與五左衛門、乃至彼らの技術の継承者が四日市に移ったことによって今に伝わっているわけではない。これまで「萬古焼の伝播」は幕末から明治にかけて伊勢桑名で始まった再興萬古である「有節萬古」の影響により東北の二本松や秋田、北関東の足利に伝わったことが建言されているが、四日市萬古焼も、四日市は桑名の隣地とは言え、創業者も陶法技術も使用粘土さえも全く異なり、その始まりは「萬古焼の伝播」によるものといえる。

「萬古焼の伝播」の元となったのは江戸後期文政年間に始まった新萬古（註一）である。その桑名で興った新萬古が県内外へと広がりを見せ、最終的に四日市に根付くことになる過程を、やきものという伝統工芸の技術伝承という観点から考察してみることとする。

1．多面性をもつ萬古焼

萬古焼は江戸時代中期の元文年間八代将軍徳川吉宗の時代に伊勢の小向で開窯した。この時期は陶磁器の歴史の中では仁清・乾山の時代と木米や仁阿弥道八の時代のちょうど中間に当る。[註二] 桑名の豪商沼波弄山（一七一八～七七）が創め、その青磁・交趾など東洋陶磁の写や、白化粧された器に色とりどりの釉薬で彩られた色絵のやきものは時代の賞賛を受け、地元だけでなく将軍の御膝元である江戸にも進出し、当時は国内でも高く評価されたやきものであった。弄山亡き後弄山の妻八百と使用人安達新兵衛が遺志を継ぎ製陶事業を継承するが、八百の死後子供たちは製陶に興味がなく一八〇〇年頃一度廃れてしまう。

萬古焼は伊勢の「地方窯」に分類され説明される。「地方窯（じかたがま）」という定義は現在のところ一定ではない。[註三] 日本国中に地方窯は数えきれないくらいあるが、現代にやきものの産地として残るもののうち六古窯といわれている常滑、瀬戸、信楽、越前、備前、丹波以外は江戸時代に操業しだしたものといってよい。そういった江戸時代に始められた窯は、藩主導で藩主が奨励、保護、窯場設置に援助がなされた窯や、商人がやきものを売り出すために行った窯などが一般的であるが、萬古焼は全く異質で他の類型に当てはまらないやきものといえる。沼波弄山という桑名の商人が、自らの個人的興味（商売でなく御庭焼的）と趣味で始め、それが京都や江戸で評判になり、将軍に呼ばれ江戸に出て将軍家御用達となるのである（製作場所を移動する、桑名藩主でなく将軍の御用達）。また作品については商売では焼かなかったとも伝わり、全容の詳細は今も謎に包まれて、なおかつ弄山一代（厳密にいうと八百らが受け継ぐ）で忽然と消える。その上で後世伊勢のやきものとしてではなく「江戸のやきもの、江戸萬古」としても定着してしまう。

程なく「伊勢のやきもの」は文政年間頃、沼波家とは全く所縁のない桑名の骨董舗森与一郎有節（陶祖与一郎）が、煎茶趣味に適う薄くて軽い木型造の急須や装飾に釉薬を厚く盛り上げて立体的に見せる盛絵など、古萬古の異国情緒的なものではなく大和復古調の新しい萬古焼（新萬古有節焼）を桑名の地で始めた。[註四] この新しい萬古焼は様々な化学反応を引き起こし、幕末に陶祖与一郎の子森與五左衛門有節・與兵衛千秋兄弟や、三重県松坂射和の地に竹川竹斎、同県津の安濃津阿漕で倉田久八らがそれぞれの意志で異なった「萬古焼」を想起し、明治初頭には、弄山が興した古い萬古や有節の新萬古の技術とはまた違った持ち味の様々なやきものが北勢の地を中心に勃興するのである。

また萬古は伊勢だけではない。前述の江戸萬古以外にも、その起源や伝わりは様々であるが、福島県の二本松萬古焼や鳴山萬古焼、秋田県の秋田萬古焼、栃木県の足利萬古焼などの萬古を冠するやきものが各地に興るのである。[註五] それぞれの地域で焼かれたやきものにはそれぞれ異なった特徴や工法が見られ、萬古焼が多面性を持った特異なやきものといえる。

2. 倣い萬古と萬古 style

何故〇〇萬古（〇〇は地名で倣い萬古のこと）と萬古を冠するやきものが幕末明治期に広がりを見せるのか。今までは「有節の発明した木型を使って素人でも簡単に作陶できるようになるため、維新後の新しい経済活動の一環として陶器作りが取り入れられた」ということが萬古を冠するやきものの説明で、二本松や秋田、足利だけでなく、本場桑名や四日市でも言われてきた。有節の始めた新萬古の技術的な伝播があった（木型造の技法）ことで「萬古風」であったり「〇〇萬古」と言われるようになったりと考えられているのであるが、果たしてそうであろうか。

維新後の当時、日本では殖産興業が盛んに叫ばれ、その中でも陶磁器は西欧諸外国（列強と呼ばれる国々）に唯一文化的に対抗できる工芸品であったことは当時の博覧会資料からも読み取ることができる。日本各地のやきものの中で萬古焼は既に京焼や薩摩焼、伊万里焼等のやきものを時に凌駕するほど有名なものであったといえる。

その賞賛の対象の技術は木型使用だけでなく手捏成形による「紙のように薄くて軽いが丈夫」なことと装飾技法がエナメル質の釉薬を盛り上げるいわゆる盛絵や練込（マーブル・杢目）などが他陶に類のないものとして挙げられている。

薄くて軽く丈夫なことと盛絵は新萬古有節焼の一つの特徴であるが、詳細に当時の史料や今に残る作品を見ていくと、一概に「有節萬古からの木型の伝播」とは違うものであったことが分る。

まず明治十年に開催された日本各地の主要産業の粋を集めて開催された第一回内国勧業博覧会の出品目録における萬古風の陶器についてみてみる。二本松萬古焼の大島義質は「急須、徳利、菓子皿」を出品し、どれも「陶萬古形」と記載され、木型成形の作品で「萬古風ニ倣ヒ一層ノ造意ヲ観ル」と評価され花紋賞牌を受けている。鳴山萬古焼の笈川坤六は「急須、土瓶、燗徳利、蛙形湯沸、月見形花瓶」を出品、どれも「陶萬古焼」と記載され、彼は褒状を受賞している。実際の物ではないがそれに類する作品は『鳴山萬古―その源流と変遷―』に載る器物より推測できるが、表面を指で押さえた指頭文と蛙などの造形物を張付けた恐らく内型ではあるが底部分と主胴部分を分離して製作されたものと考えられ、組立式の細工木型ではなかったと思われる。

秋田萬古焼の佐伯貞治は「牡丹海棠コブシノ花模様急火焼、葡萄造付急須、蓮造付急須、木目肌紅葉急須、木目肌桜花急須、鍔釜形急須、竹手結急須、達磨形急須、竹手急須、桜花形急須、湯冷器、瓢箪切透葡萄切透茶巾挿、紅葉鹿蕗菓子皿、書画水指、蓮ノ葉彫茶台、菊形茶台、蓮葉彫茶碗、蕗造付茶壺、蓮造付急須」と多数を出品している。

特に目録には萬古とは表記はないが「西京及桑名製ノ器物ニ似テ自ラ別ナリ意匠宜シトス」と評価され、特に達磨形急須と蕗造付茶壺を「最モ良作」とされ花紋賞牌を受けている。蓮形の多用や「木目肌」という練込技法を使っている点はどちらかというと四日市萬古焼的な感じがするが、「西京及桑名」に似ているとの評価は、当時桑名や西京の出品作の傾向が佐伯の作品から推測できる例といえる。

あまり知られていないが、山形の平清水焼も萬古風のやきものを作っていたことがこの第一回内国勧業博覧会の審査評語により分る。山形の佐藤利兵衛が出品している平清水焼陶工奥山三藏作の「山水草花模様急須」は磁器であったようだが、その評価に「陶質萬古二類シテ粘硬ナリ形状優雅製作其式ニ適フ」と評され花紋賞牌を受け、三藏の子奥山三五郎は自ら「鋳地菊形透桐彩色珈琲碗、乳入、砂糖壺、急須」を出品、どれも「磁」のみと記載があるが「能久萬古ノ式ヲ模倣ス」として父同様花紋賞牌を受賞している。萬古に類して粘硬であることや形状が優美であることが「萬古ノ式」であったことが分る。

次にアメリカ人で明治初頭の日本を陶器収集で駆け抜けたエドワード・シルヴェスター・モースの『Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery』（一九〇一：以降訳題『日本陶器目録』とする：註六）を見てみる。萬古焼については伊勢國以外に、武藏國で「江戸萬古」（伊勢國と同様の説明で作品は挙がっていない）が項建てされている。岩代國には「二本松」（imitation of Banko pottery萬古の模造品）が項建てされてはいるが産地についての説明はなく、作品五点と印影五点、伊勢國の萬古解説の「有節」項中に二本松萬古が紛れ込んでいる（「雙松」印）ものが一点あるのみである。あとの秋田や山形、下野（足利）については「萬古」に関して特に記載がないことから、流通量が少なかったためか収集されていなかったと考えられる。ただ興味深いことに越後国新発田焼と山城國の於多福庵と鸞亭というやきものに対して「萬古風（Banko style）」としてそれぞれ解説されているのである。モースの新発田焼標本二点は

白土と赤土が使われ無釉で手捏ね作品のようである。他に見る新発田焼の作品は、張付や急須の型の様式が鳴山萬古によく似た器形をしている。[註七] また山城國於多福庵、鸞亭について解説の中にある作品は、於多福庵は「表面が繊細に凸凹しており一枚の粘土をたたんで作る」たたみ作りで作られているようである。鸞亭は白土の素焼きのもので暑い白釉が掛かっている作品が挙げられ、蓮形のティーポット形状のものも作られていたようだ。

これらの資料から、二本松の「萬古風ニ倣ヒ」という部分と、平清水の評価に出てくる「其式」「萬古ノ式」、モースの言う「Banko style」は、実際の出品作品が今のところ不詳であるため目録等記載により推測するほかないが、前述博覧会出品作品やモース収集標本の特徴から、たたみ作りを基本とする「陶法技術」と磁器質的硬度を持ちその上手捻成形や木型成形しやすい「土」（せっき質）であったのではないかと思われる。

3．萬古特有の技法「たたみ作り」と「細工木型」

幕末から明治初頭に見られる萬古焼の技術的特徴の中で、「萬古様式」や「萬古風」として一般に認識されていた「陶法技術」と「土」のうち、陶法技術は「木型」の使用が技術伝承にとって重要と考えられる。その萬古特有の技法に関連して、以下に「細工木型」と木型を使った工程「たたみ作り」についてそれぞれの「伝わった系統」を考えてみる。

萬古焼の型成形の特徴の一つに「たたみ作り」というものがある。萬古焼のたたみ作りの作品としては「布山」製と「堀友直」製のものがよく知られる。たたみ作りの「たたみ」は、その器の表面仕上げの状態が床材の「畳」に似ているからという説もあるが、陶土を引き延ばし板道にしたものを木型にたたむ様に押し付けて作る一種の「タタラ作り」からという説が妥当ではないかと考えられる。原色陶器大辞典には「中国中部のやきものにはこの手法を用い

たものが多く、わが国においても型物には数多くみられる。大正時代までは常滑の小径の土管の成型にはこれが多く用いられ」とある。

型作りの基本的な作り方であったようだが、幕末期にこの「タタラ作り」は京都で、簡易な皿等だけでなく、茶器等製作に応用的に行われていたと思われる。萬古焼の中で「たたみ作り」は京都と関係することが少なくない。

布山由太郎は京都で商売の修行をしていた際、清水焼の窯場に出入りをして作陶を覚えていった伝承がある。もう一人桑名の走井萬古の陶工精華は京都より加藤茂右衛門に呼ばれ作陶し、走井萬古閉窯後、唯福寺に寄寓して四日市萬古焼に作品を残したとされる。この「精華」は名のみ伝わり、作品の詳細も不明で、もしかすると四日市では別号で作陶していたかもしれないが、誰を指すのか今のところ不明である。詳細は不明だが窯道具も作り、山中忠左衛門の窯で作品を焼いたことも伝わる。(註八)

倣い萬古の二本松萬古焼創業に関わった山下春吉の協力者で京都から迎えられた三浦屋文助も畳作りの名手であったとも伝わっている。(註九)

堀友直自体は京都で修行したという伝えはないが、堀友直自身の申告によると、自らの技法は「自己研究」により編みだしたとしており、(註十) 桑名の佐藤久米造や京焼の技術を参考にしたと考えられる。また堀友直の工房（堀窯）は、当初の長島から四日市へ移る際、まず羽津の志氏野陶器の協力を得たとのことも伝わるが、この窯は田端教証との関係もあったと思われ（後述）、その際京都の技術を持つ「精華」との関係も少なからずあったと思われる。

たたみ作りの次に萬古焼の木型造であるが、萬古焼が産業として成り立つきっかけになった「轆轤成型技術に比べ、誰にでもすぐできる成形方法」としてよく説明される。その内型発明は「森有節」が日本で最初といわれ、製法と製品は世の中の賞賛を受けたといわれている。今までの通説で行くと、発明のきっかけは提灯作りから発想を得たとい

われている。

木型の類型で現在木型の作りや実物が分るものは、朝日町所蔵の森有節家伝来の木型群と、二本松萬古井上窯が所蔵している伝二本松萬古焼木型群、亀山市旧家に伝来している鈴鹿関萬古焼木型及び四日市萬古焼の作品に残る木型趾の四つあるが、関萬古焼の型は四日市より伝わったものであり、系統としては三つと考えられる。

このうち明らかに系統が違うものは森有節家伝来の木型である。他の二系統が「作品を木型から作る」ために存在しているものに対し、有節家木型は「作品を作るための木型」として存在している点で他の類型と考え方がまるで違う。作品を作るために、その作品にあった木型を作ったため、口縁の広さによって分解できる木片の数を少ないもので四片から多いもので十片まで増やし、それによって心棒断面の形状も正方形から十角形という具合に作られている。そんな有節家の木型は量産に向いているとは言えない。なぜなら極めて緻密で精巧な、それこそが芸術品といえる木型を作るのに膨大な技術と時間が必要だからだ。

有節家木型の製作はいつから作られたのか不明である。ただ天保七年藩主臨席の許で披露された陶技が「轆轤」とされていること、天保十年製の三重県指定文化財御神酒徳利は簡易な内型（部分的に分割されて成形し接合している）で作られていることから、細工木型についての発明はそれ以降、早くても天保末期と考えられる。(註十一)

四日市萬古焼の型は基本的にとてもシンプルで、有節家木型のように口縁の大きさによって分解できる木片数を変えることなく類型もほぼ一つ（心棒断面は四角形で木片は八個）で、大きさと成形様式（達磨形、南瓜形や提灯形等）に必要な型がつくられている。

この木型は有節家から伝わったものであろうか。木型製作に関して不可解な伝承がある。技術の秘匿に力を入れていた森有節が、独自に発明した機密の塊細工木型を、桑名の刳り物師佐藤久米造に渡して製作を依頼したという伝承

である。またその久米造もこの木型がどのように組み立てられているかわからず、水中で分解しその仕組みを理解し複製を作ったという。これまでこの伝承の説明は、自己の陶法について外部に漏れるのを忌避していたことについて疑問視されてきたが、近年森与一郎と與五左衛門の親子の人格が一つになってしまっていたことによる矛盾となっていたことが判明し、久米造は木型の実物を与一郎もしくは與兵衛千秋から借り受け仕組を理解したことと考えられる。水の中に浮かべた事象は彼が製作する際に使用木の膨張率や反り等計算するために試行錯誤していた行為が誤伝したものであろう。

筆者は可能性の高い仮説として「四日市萬古焼の型は久米造の工夫によるものではないか」と考える。芸術的で緻密且つ精巧な木型の根本的な「心棒を抜いて、その開いた空間から木片を取出す内形の細工木型」をもっと簡単に作れるようになれば、木型造のやきものが誰にでも出来るようになるといえる。あまりにも手間のかかる有節家木型では作陶が難しいことから久米造が改良したとすれば、その意味で久米造が桑名萬古の始まりとされ、多くの弟子を持ったという伝承（ただ弟子といわれている堀友直、山本数馬等も公言されていない）もこの木型考案によると考えれば収まりもつくとはいえないであろうか。

最後に二本松の型は、有節家木型と抑々作りが全く違う。[註十二] 恐らく木型製作の成り立ちが違うためで、有節家木型が全く影響しなかったわけではないが、京都から伝わった「たたみ作り」の技術から、二本松独自の内型の木型を発明したものと推測できる。

二本松萬古焼は、それまでに当地で焼かれていた「ふすべ焼」の陶工山下惣介（四代）の弟春吉が京から来た三浦屋文助のたたみ作りの急須から陶芸に目覚めて工夫を凝らし編み出されたものと伝わる。三浦屋文助（西京の人文次が三浦家に入ったという説あり）は山下春吉の兄惣介に雇われた京都の職工といわれ、嘉永六年に二本松に来たとのこ

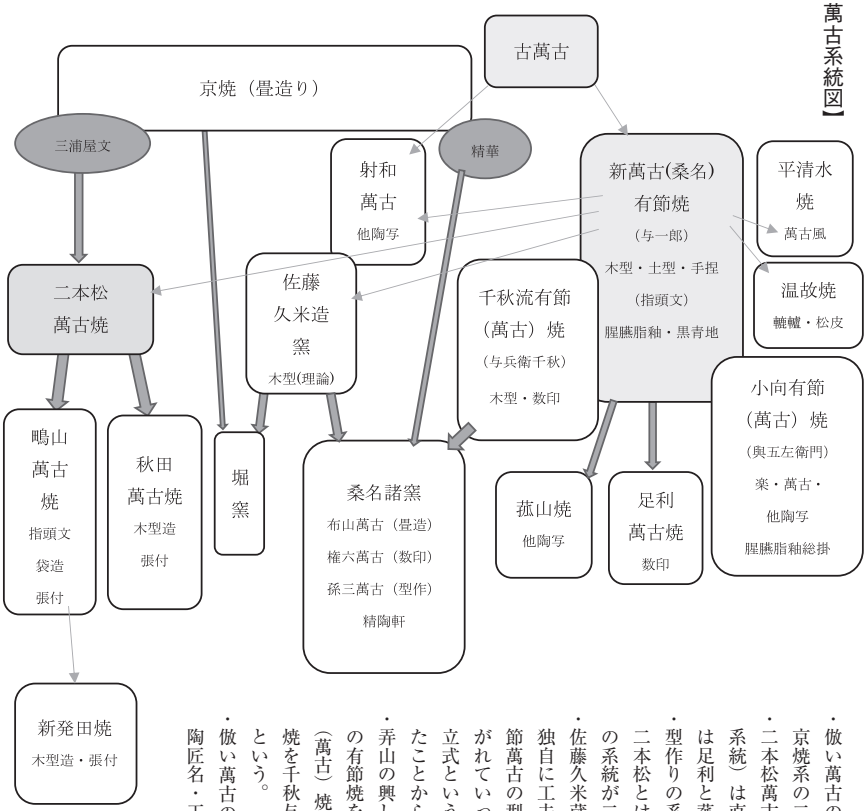
とである。その文助と胴が四角い手捻作品を二本松藩の重臣丹羽石見に進呈したとされる。その時茶陶に四角いものが不釣り合いである点を指摘され、安政三年三月某日二本松藩側用人神田権之助が丹羽家所蔵の茶器、「勢州桑名初代有節の万古」をわざわざ持参して春吉に示したことにより、それをヒントに試行作陶し続けた。「萬延元年六月五日、丹羽紋右衛門より安藤瀬兵衛へ内進、二本松出来之急須一つ進物役より取上相廻候」とあるが、この頃は手捻で試行錯誤が続けられていたと考えられる。文久二年浅尾数馬之介の発案による丸形の内型、その型を発展改良した渡辺伊八郎の半型、明治四年伊八郎がくずし型を発明して二本松萬古の発展の礎を築いたとされる。これらのことから二本松萬古焼の型は有節の直接的な技術の伝播というものでなく、独自の工夫をもとに編み出した木型に若干有節の影響を受けたものと考えられる。

以上たたみ作りと木型についてみてきたが、たたみ作りについていえば有節家が発明したとは言えず、京都の技術が各地に伝わり、その中で桑名や四日市、二本松で発展、自家薬籠としたものといえる。また木型も一概に有節家からの技術が伝播したというより二本松は独自に、四日市には有節家の木型の考え方を利用して作りやすさや工程の簡略化という改良により編みだされたものであったといえる。

4．史料にみえる四日市のやきもの～楽只窯、海蔵庵窯、瀬戸助焼　他～

今まで「萬古焼の伝播」について論述してきたが、現在の最有力伝承地である四日市に「伝播」する要因について考えていきたい。伊勢国は古来神宮や街道の宿場駅をいくつも抱える、京都や名古屋と同等の消費地であり、またやきものの見地から行くと周囲に古来より信楽、瀬戸、多治見、常滑といった大規模な産地に隣接した土地であった。

【倣い萬古系統図】



・倣い萬古の直接的な発信地は古萬古ではなく、有節焼と京焼系の二本松が主であったと考えられる。

・二本松萬古焼と有節焼（新萬古・与一郎と与五左衛門の系統）は直接関係のなく、二本松は鴫山と秋田、有節焼は足利と菰山が技術的な伝播、被伝播の関係を持つ。

・型作りの系統について有節萬古の構造的な特徴は桑名や二本松とは全く違い独特のものといえる。京焼の畳作りの系統が二本松や桑名に伝播したものと思われる。

・佐藤久米蔵の桑名萬古始祖説の元は有節木型の作り方を独自に工夫したことからと考えると説明が付く。この有節萬古の型から発想した急須型は桑名や四日市に受け継がれていった。二本松の型は心棒の発想が同じである組立式という独自のもので、東海道で「萬古」が有名であったことから萬古を冠したのではないかと考えられる。

・弄山の興した古い萬古を古萬古、与一郎の想起した桑名の有節焼を新萬古、与五左衛門が小向で始めた小向有節（萬古）焼と父与一郎死後跡を継いだ千秋流有節（萬古）焼を千秋与兵衛死後合わせたものを有節萬古（数印以外）という。

・倣い萬古の名称として地名を冠するものは○○萬古焼、陶匠名・工房名や時代を冠するものは○○萬古とする。

豊富な物流のだなかで萬古焼以前または同時期に四日市のやきものとして、いくつかのやきものが史料にみえる。ここでは四日市萬古焼の前史の中で地元にも伝わる唯福寺の「海蔵庵」のやきもの、観古図説のなかの「四日市焼」、モースの『日本陶器目録』にある「瀬戸助焼」、あと「志氏野陶器」について各々考察していきたい。

○楽只窯・海蔵庵窯

まず海蔵庵のやきものは、文政十二（一八二九）年ごろ、四日市東阿倉川において、田端教正（浄土真宗唯福寺住職）が信楽の陶工上島庄助の協力によって始めたものである。垂坂山を中心とする、やきものに適した土を発見し、地域の殖産（貧民救済）のためやきものを始めたという。このやきものは海蔵庵窯、庄助窯、楽只窯と混同されることが多いが、[註十三] 海蔵庵窯は商用の窯、楽只窯は田端教正が趣味とやきもの研究という実益のために焼いたもので、当初は信楽代官も兼ねた四日市代官多羅尾氏の関係した信楽の陶法から学び始めたものである。その後楽只窯は、教証の陶技が進んでからは信楽の用法に限らず、近隣で名声を博す新萬古有節焼[註十四]の影響を受けたことが、今も残る作品によって分る。また教証の作陶は、陶土、築窯、熟練職工の育成、有節の萬古焼の研究（細工木型等）など、後発した山中忠左衛門らの開窯の下地となったと考えられ、将来の四日市萬古焼へと繋がる大きな役割を果たしたといえる。田端教正が七十歳になる明治初年頃その役割を終え、窯を閉じる。教証とその事績については唯福寺にある「海蔵庵窯趾」碑がすべてであるため全文を挙げておく。

海蔵庵窯趾　黄檗管長玉田書（碑表）

（碑文）

當山第十三世住職田端教正師文政十二年江州信樂陶工上島庄助ヲ招キ此地ニ窯ヲ築キ製陶ヲ創ムコレ実ニ四日市ニ於ケル陶業ノ先驅タリ當時庄助ハ窯材耐火物ノ入手ニ苦慮數年ニ渉リ近傍山野ヲ探礦シ試験スルコト幾十回猶

適品ヲ得ルニ至ラズ遂ニ庚申山ノ土ヲ以テ築窯シ多數ノ工人ト用具釉薬顔料ノ類ハ總テ之ヲ信樂ニ求メシモ窯材不良ノ為辛苦惨憺想像ニ絶スサレド師ハ飽ク迄之ヲ産業化シ以テ貧民ニ職ヲ與ヘント欲シ一部檀徒ノ反對ヲ排シ巨額ノ私財ヲ抛チ遂ニ能ク之ヲ完成セリ偶四日市代官多羅尾氏ハ同郷人庄助ノ関與ト師ノ熱意ニ感シテ大ニ之ヲ庇護援助シ其ノ御用窯ト為ス然ルニ幕末ニ至リ氏ハ退官シ庄助モ亦嗣子失踪シ慶應年間惜クモ廃絶ノ止ムナキニ至リシガ工人數名ハ藤井元七窯ニ移リ更ニ山中忠左ヱ門堀友直等桑名系萬古ニ其技術ヲ合流シ以テ四日市萬古ノ基礎ヲ作レリ教正師ハ老後私塾ヲ開キ子弟教導ノ傍陶作ヲ樂ミ明治十四年八十三歳ヲ以テ示寂ス距今百二十餘年師ガ蒔キシ一粒ノ種子ハ後萬倍シ大萬古焼トシテ燃タル美果ヲ結ビ巨然工産界ニ重要地歩ヲ占ムルニ至ル洵ニ偉ナル哉茲ニ其遺徳ヲ頌シ陶跡ヲ顯彰センガ為有志相謀リテ碑ヲ建テ以テ之ヲ不朽ニ傳フ

昭和三十年文化ノ日　内田金次撰　出口碧巖書（註十五）

○四日市焼・阿倉村焼

次に四日市焼であるが、蜷川式胤の著した『観古図説』によると、弘化三(一八四六)年に開窯し明治五（一八七二）年頃まで阿倉川に存在していたとされるやきもので、誰が作陶していたかについては不明ではあるが粟田焼風や瀬戸助作の中服茶碗を作っていたとされる。『観古図説』文末には、

毎年徳川家ノ賤臣東京本荘一ツ目ノ住人高原藤平方へ輸送シタリシカ明治元年後ハ之レモ止テ家業立カタキニ付万古作ノ急須ヲ摸製シテ商フナリ

と記載されている。こういった記述から、蜷川のいう四日市焼は田端教正に作陶の手ほどきをした上島庄助が彼とともに始めた前述の海蔵庵窯を指しているものといえる。

海蔵庵窯では田端教正と庄助がともに阿倉川村で、商業的な成果を求めて信楽風の陶器を焼いたと考えられ、その

やきものは一時四日市において盛んになったとして伝わる。しかし幕府の出先機関としての四日市代官所の後援が無くなるとともに明治維新ごろ廃業に至ったとされる。

塩田力蔵編『日本近世窯業史』の中に挙げてある明治十七年小藤文次郎調査において、

四日市新萬古焼は弘化三年阿倉川村にて始めて起業。粟田窯に類する陶器を焼く。幕府に献上するが維新以来廃せり

と記述されており、山高信離『大成陶誌』のなかで「阿倉村焼」という項で、

元加納遠江守領分にて阿福茶盌千個つゝ毎年幕府に献す、明治五年此まで窰猶存すと云ふ

とある。以上のことから四日市焼（いわゆる海蔵庵窯）は、幕末新萬古より若干遅いか同じくらいの時期に、当初貧民救済を目途に田端教証によって始められ、当時の四日市代官多羅尾氏の庇護を受けて、上島庄助ら信楽系の陶工によって主に江戸で消費するために焼かれていたもので、別に阿倉村焼ともといわれていたと考えられる。(註十八)

○瀬戸助焼

三つ目として取り上げる瀬戸助焼であるが、今まで伊勢のやきものの中であまり詳細が分っていなかったやきものである。明治九年頃成立した『陶器年暦』に「瀬戸助焼　伊勢四日市ノ驛ノ人ナリ傳不詳明和安永ノコロト云」という記述があり、明治二十年頃成立の『陶磁攷』は少し詳しく、

尾州ノ人瀬戸ニテ陶法ヲ学ヒ後明和安永ノ頃伊勢州四日市駅ニ住シテ製陶スト即チ磁器ナリ益シ瀬戸窰ニ於テハ此頃ヨリ磁器ヲ製シタリト見ユ然レ𪜈未タ精良ナラザルヲ以テ前ニ述ル如ク加藤民吉ガ奮起肥ノ有田至リテ磁製ノ妙訣ヲ熟得シ帰来大ニ此業ヲ廣充セシナラン

とある。明和安永の頃といえば弄山の焼いた古い萬古の時代である。また磁器を焼成していたとするならば日本の陶

芸史のなかでも非常に早い製成となる。瀬戸助は天明寛政の頃江戸においても茶碗師として、江戸時代幕府役職者や諸大名の要諦のわかる『武鑑』にも記載がされており、また日本全国で瀬戸助窯があることでも有名であるが実態は不明の陶工である。

モースの『日本陶器目録』には「瀬戸助焼は伊勢の四日市で高原という人によって江戸で売られたやきもの」とも記述がある。この記述は『観古図説』の四日市焼を意識して書かれているようにも見える。蜷川とモースのいう「高原」は高原藤平のことであると思われる。高原は江戸の高原焼の創始者高原藤兵衛の一族と考えられ、将軍家御茶碗師として御用窯を浅草本願寺前で営んでいた（『原色陶器大辞典』及び『工芸鏡』）。前述の『観古図説』四日市焼の考察にも「高原」が出てくるのは、この瀬戸焼と四日市焼（いわゆる海蔵庵窯）を混同したものと考えられる。

また瀬戸助焼の実物について著者は実見したことがないが、明治十三年十一月田中芳男が記した『采集陶磁器目録』の中に「茶碗　陶　伊勢三重郡四日市　瀬戸助　明和安永間　金三円五十銭」と売買が記録され存在していたことが分る。

○志氏野陶器

前述の三つの四日市のやきものの他に、四日市萬古焼とほぼ同時代であるが、後の四日市萬古焼とは区別されるやきものとして「志氏野陶器」が挙げられる。このやきものは、『明治六年地誌提要材料編』に萬古陶器（朝明郡小向村等製）と併記された志氏野陶器（三重郡四日市等製）と表記されていたことが分る。三重県の調査であり、明治六年はちょうど四日市に堀友直が窯を築いた時期でもあり、山中忠左衛門の窯も明治三年には操業を開始しているはずだが、わざわざ「四日市製」の「志氏野陶器」として記載されている。

羽津村といえば慶應三年に元七という陶工が桑名藩内（当時の羽津は桑名領）で確認され、この元七が羽津の地に窯

を築いて『ひでの』の印を捺した作品を残した藤井元七と考えられるということが石原佳樹氏『市場価値の高い四日市万古―移行期に「志氏野陶器」の存在』（発見！三重県の歴史）にて述べられている。しかし『第三回内国勧業博覧会三重県出品解説』の藤井元七自身による申告は慶応二年「萬古生器地ヲ製造スルヿヲ始メ以来生器地而已製シ窯焼業者エ販賣シ営業セリ明治十六年煮至リ焼窯ヲ建築シ焼窯業ヲ創業セリ」としており、桑名藩での陶工としての確認はともかく、志氏野陶器窯の経営者として関わっていたかどうかは定かではない。ただ明治六年当時有節焼系とは別に海蔵庵窯（阿倉川）に影響を受け、隣村の羽津にて開窯し、海蔵庵窯閉窯後、工人等引き取って（海蔵庵窯趾碑文にある）、桑名の新萬古系と違う信楽系のやきものを焼いていたことは確かである。(註十七)

以上資料に見える四日市のやきもの「楽只窯」、「四日市焼（海蔵庵窯・阿倉村焼）」、「瀬戸助焼」、「志氏野陶器」についてみてきたわけであるが、他にも『日本陶瓷史』（大正十五年）に明治初年に開窯し「今日は廃絶して了つた」三重郡富田村の「富田焼」というものも見える。これは志氏野陶器と同一の物かどうかも不明である。また四日市萬古焼の国内外の博覧会で好評を博した一つの特徴である「木目焼」の創始者四日市駅医師千葉伶三という人物が前田了白写本『茶譜茶話聞書空也堂来由』（成立年不詳）に載るが、千葉が萬古陶匠茂福平藏の師匠であることが分るくらいでこれもまた詳細は不明である。

これらの四日市のやきものは資料が不十分なことや四日市萬古焼に吸収されてしまったことも含め、古萬古、有節萬古、四日市萬古焼という三つの個性的でインパクトの強い有名なやきものに比べると、どうしても埋没し見えづらい「経緯」となってしまいがちになる。しかしこれらやきものが、伊勢の地で豊富な物流に押し流されず、しっかりと根付いていたことが後の歴史に繋がったといえる。

5．桑名からの移入と山中忠左衛門～四日市萬古焼の成立～

前述の四日市のやきものは四日市萬古焼前史といえる。では四日市において所謂「萬古焼」が焼かれるようになったのはいつのことであろうか。現在四日市の萬古焼の始めに語られるのは山中忠左衛門である。山中忠左衛門は伊勢国三重郡末永村（現四日市市）の人。幕末嘉永年間に地区困民の救済のために末永村で窯を開いたとされ、萬古焼研究者水谷英三氏に「四日市萬古の父」とまで言われている。

近年幕末明治の萬古焼の様子については朝日町所蔵寄贈文書等資料群の解明等により大幅な見直しがなされてきている。所謂「有節萬古」の位置付けがこれまでの與五左衛門有節の天保二年開業からもう一代前の父与一郎有節の開業する文化後半頃まで大幅に遡ることとなってきたことが大きい。そして与一郎有節が始めた桑名の新萬古有節焼に影響を受けた陶工（与一郎有節の弟子も含む）も明らかとなりつつあり、四日市へ桑名からの萬古焼の移入ももう少し早くあったと思われる。また諸本で山中忠左衛門が本格的に焼成に成功したのは明治三年（『海藏小誌』による。）とされている。山中忠左衛門開窯以前に四日市で陶工として活躍したと思われるのは前述の文政年間に開窯した田端教正は別格として、圦山開之助、蔀莊平、岡本城峯無眼楽らが挙げられる。また山中忠左衛門の窯（山忠窯）が本格稼働した明治三年以前に創業したと思われる四日市の窯は、広く認識されている明治十四年第二回内国勧業博覧会解説に記載があるように、圦山開之助開窯が安政六年、小川半助が万延元年、森莊吉が文久元年、堀友直が文久二年となっており、山中忠左衛門が事業化に成功する以前に各々製陶が始まっている。それ以外にも慶應元年伊達傳三郎、谷スミは慶応二年、藤井元七は慶応三年、太田仁右衛門、茂福平藏は明治元年に開業しており幕末には桑名、四日市にお

いて多勢の窯ができていたことが分る。

そのことから通説のとおり忠左衛門だけが陶工として窯を始め、その陶技を後進の有志に教えたことによって四日市の萬古焼が始まったとは言えない。山中忠左衛門の功績はこれまで言われているような「初めて四日市で窯を成功させた」ことではなく、「四日市において私財を投じてやきものを産業化し定着化させた」ことであると考えられる。

人との関わりの中で、その技術的な移入はどのようなものであったのであろうか。前述のとおり、四日市には、信楽系の海蔵庵のやきもの（楽只窯・海蔵庵窯・四日市焼）や瀬戸助焼に見られるような雑器（瀬戸系）を作る素地があったうえで、幕末の混乱の中、桑名より与一郎の弟子蔀荘平や無眼楽岡本城峯、京都の技術を基礎にした圦山開之助らが移り、新萬古有節焼とは違う斑駁器や手捻技術を伝え、その技術に小川半助、伊藤豊助らが触発された。同じく桑名より佐藤久米造が考案した有節家の物とは違う細工木型を用いて谷スミや伊藤庄藏らが技術を競い、堀友直は桑名の陶工の影響も受けながら独自に京焼技術の外型による土瓶製造やたたみ作り茶器を生産していったと考えられる。

山中忠左衛門の山忠窯は後に四日市萬古焼の名工といわれる職工を多数擁していたのはまぎれのない事実である。また田端教正師の蒔いた種から信楽系の技術は益田佐蔵や藤井元七らによって受け継がれ、いろいろな技術や職人が交じり合うことによって、豊かな発想と、異質な文化が互いに切磋琢磨できる環境を醸し出し、他に例を見ない四日市のやきもの「四日市萬古焼」が成立したといえる。

この成立過程において、単一的な思想や技術に固執することなく、「誰もしていない面白い原野の開拓」精神と自力本願の研究開発に膨大な財力を消費することによって四日市萬古焼は文化と産業の両立を可能にしたと言えよう。

伝統的なものだけでは地域を支える産業としての規模は保てない。伝統的であり、商売として成り立つ先進性や実用性を兼ね備えている必要が有るが、四日市という場所は地の利として萬古発祥の桑名の隣であることとやきものに

適した陶土があったこと、あと人の利として幕末に「四日市萬古焼」として開花する以前にやきものに関して歴史と従事していた職人と職人になる人が存在したこと、あととても重要なことであるが天の利として、これらの条件を生かせる財力と先見の明を持った人物がいたことが大きいといえる。

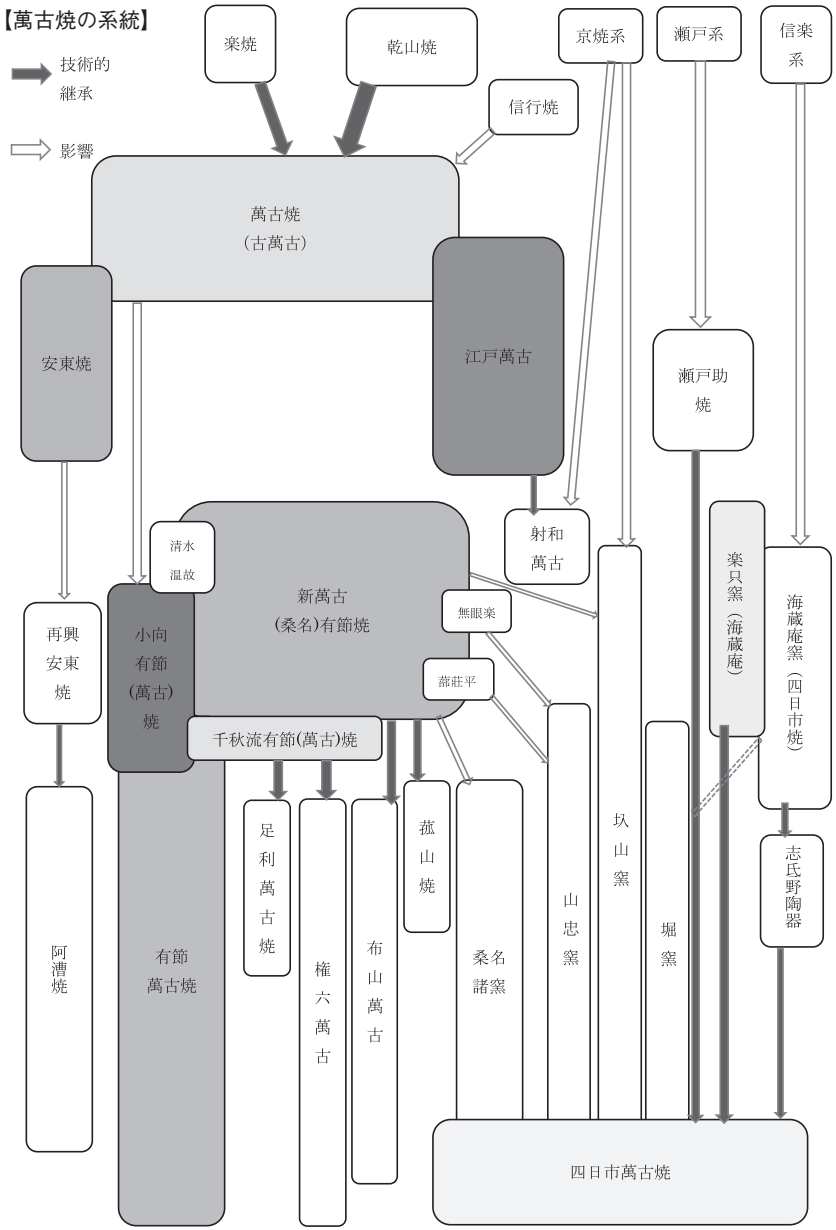
今地域文化及び地域産業として成り立つ礎となった人々の事象が少しでも明らかになることで、萬古焼の真の姿が顕れる。そのために今後も資料研究がなされ、広く語り継がれていかなくてはならない。

6．「萬古」とはなにか～萬古名称の伝承～

萬古焼の「萬古」という名称の由来[註十八]については、弄山の陶工ブランド名「萬古」より萬古焼と名付けられたとされる。「萬古不易」の印については弄山死後、安達新兵衛が「萬古之不易（弄山の意志を伝えるためという意味で俗説の永遠に変わらないものとして意味ではない）」を願い押印したと考えられる。本来やきものは、地名や陶工名を冠するものが多い。同じ創製者であっても窯の場所を変わったことによって名称も変わることがやきものの世界では普通によくあるが、萬古焼は仁清や乾山同様陶工名であったため桑名から江戸に移った際も変わることはなかった。

新萬古の与一郎有節も当初は、名称として有節焼、桑名焼などと冠していたと思われるが。伊勢乃至は江戸由来の「萬古」というブランド名を継承したと考えられる。

本論では萬古焼の伝統的な技法「たたみ作り」と「木型」、技術伝承の素地となる地域性をもとに萬古焼がいくつかの倣い萬古の一つとして「四日市萬古焼」となった系譜を見てきた。古萬古から新萬古への技術的陶法の伝承はほぼない。また新萬古として萬古焼を再生した森有節家の技術や陶法についても、基本的に「移植」されたものではな


【萬古焼の系統】
技術的継承
影響
楽焼
乾山焼
京焼系
瀬戸系
信楽系
信行焼
萬古焼（古萬古）
安東焼
江戸萬古
瀬戸助焼
射和萬古
清水温故
新萬古（桑名）有節焼
無眼楽
蔀荘平
楽只窯（海蔵庵）
海蔵庵窯（四日市焼）
再興安東焼
小向有節（萬古）焼
千秋流有節（萬古）焼
阿漕焼
有節萬古焼
足利萬古焼
権六萬古
布山萬古
菰山焼
桑名諸窯
山忠窯
坂山窯
堀窯
志氏野陶器
四日市萬古焼

く、有節家の発明による新たな発想を得て、自らが新しい技法を編み出していった根本的な工夫していく思想そのものが遠く「秋田萬古焼」であり、「二本松萬古焼」であり、それら諸々「萬古焼」であったといえる。

「四日市萬古焼」として伝統的工芸品にもなっているやきものの成り立ちは前述の古い萬古からの流れからという通説とは若干違い、どちらかというと幕末から始まる社会システムの激動による勃興と考えた方が分りやすい。明治の時代から現代にいたるまで、萬古焼は新萬古有節焼とは違う「明治萬古」、「大正焼」等優れた工夫によって甦り続け、その伝統的工芸の知恵で地場産業としても成り立っているのである。

註

一　本論では江戸中期沼波弄山が創成した萬古焼を古萬古と云うのに対し、森与一郎が桑名で新たに焼き始めた有節焼以降のことを新萬古という。

二　古萬古の時代的な検証は岡村『色絵の系譜―萬古の生まれた時代』四日市市立博物館研究紀要第十四号参照。

三　本論では「地方窯」の「地方」は「チホウ」ではなく「ジカタ」とし、将軍家を初め大名等が行った、自身が茶人趣味等により作陶に関与した「御庭焼」を除く、その土地に根付いたやきものの窯を「地方窯」とする。同じような用語で国焼というのは本窯である瀬戸窯以外の茶陶。

四　陶祖与一郎及び有節焼等桑名の萬古焼については井上喜久男『神宮徴古館所蔵萬古焼について』瑞垣第二四一号及び岡村『幕末明治期の桑名の萬古陶工』桑名市博物館紀要第十四号参照。

五　萬古を冠せず影響を受けたやきものは多い。代表的なものは三重県津市の安東焼や阿漕焼が挙げられる。本論で詳しく触れなかったが秋田萬古焼や鴫山萬古焼等倣い萬古はどのように取り上げられていたか明治年間に書かれた『大成陶誌』から見て

みる。その中に二本松及び鴫山は項目が立てられておらず、「佐藤伊兵衛」項の後段に「安達郡二本松に萬古焼を模造す、其窰は同郡成田村にありて、嘉永年間黒釉の土器を製し、明治初年に萬古焼の模造を創む、会津郡田島村岩瀬郡長沼村安積郡福永村にも粗器を製す、開業皆近頃なり。」とある。同書中羽後國の項には秋田萬古焼の「佐伯孫三郎」が立項されており、「南秋田郡保戸野愛宕町に住し、（中略）同郡泉村に築窰し明治五年二本松村田鐵之助を雇ひ、三重縣に派して萬古焼を傳習し歸來士族の子弟五十餘人を本業に就かしむ、十五年自宅に移す、同年八月磁器を試む、（後略）」とある。惜しくも足利萬古焼については記述されていないがそれぞれの立ち位置がみられて面白い。

六　原著『日本陶器目録』の訳文は岡村『モース・コレクションのなかの萬古焼』四日市市立博物館紀要第十二号参照。

七　後に新潟県で新発田焼を始める保科謙吾は第一回内国勧業博覧会に羽前国置賜郡米沢立町から出品しており「中盌（はち：ほとぎ）、筆置」を出品、「陶白黒」となっている。この陶白黒やモースの白土と赤土という表記から練込の作品だった可能性もある。また註五に挙げた『大成陶誌』越後國の項に「保科謙吾」項あり、「新發田上町の住、明治十年十一月草水三光二村の土を得て茶器を製す」とある。

八　『海藏小誌』参照。

九　『二本松万古焼の話』参照。

十　『明治十四年内国勧業博覧会三重県出品解説』参照。

十一　有節家に残る木型群の中で現在明らかになっているものの中で年紀の彫銘及び墨書銘があるものは文久二（一八六二）年、慶応四年、明治二年、同三年（一八六八～七〇）のものがある。木型は與五左衛門弟與兵衛が考案したとも伝えられ、そのことから與兵衛の亡くなった元治元年までには作品が作られていたといえる。

十二　二本松萬古焼の全般に関しては『二本松万古焼の話』及び『鴫山萬古』を参照とした。東北地方への萬古焼の伝播は足利

系と二本松系と二つの流れがあることは浅川充弘氏が既に『萬古焼の東日本への伝播』（平成二十七年度朝日町歴史博物館企画展「萬古焼、東へ ―秋田・二本松・鴫山・足利―」図録所収）で指摘されているが、筆者は二本松萬古焼及び二本松萬古焼の派生である鴫山萬古は有節萬古の伝播ではないと考える。

十三　庄助窯というものは抑ない。四日市市唯福寺境内にある『海蔵庵窯趾』碑文によると楽只窯と海蔵庵窯の関係は明確であり、教正師や庄助の想像を絶する苦労も慮れる。窯業の地域の殖産興業化や四日市代官所との関係なども碑文に撰ばれ、「四日市ニ於ケル陶業ノ先驅」たる気概が彫られている。

十四　有節の萬古焼との関係は、与一郎有節の存在が不明であった頃は與五左衛門の小向開窯が天保二年のため田端らの開窯は三年ほど早いと考えられていたが、文政年間に創業した陶祖与一郎の作陶のほうが早いこととなった。

十五　井上喜久男氏より教示を受けたものを、現地碑文により確認した。

十六　四日市のやきものの陶工について政田庄兵衛について挙げておく。政田は今のところ明治六年ウィーン万国博覧会に出品したことが分る陶工。ウィーン万博の目録に他陶に先んじて萬古焼が並ぶのであるが、その中で一人政田のみ「急須　スカシ入　一　三重勢州四日市　政田庄兵衛造」と氏名と住所が分る。他に萬古焼は十四品出品されていて器種は分かるが、出品者は全て「三重（県）勢州萬古」「萬古」となっているため誰の作品かは不明。このことから政田は萬古焼ではなく四日市焼として出品された可能性が大きい。これ以降政田が資料に出てこないこと、「政田」が「益田」の誤伝とではないかとの考えから、政田庄兵衛は四日市焼の窯に従事していた陶工の益田佐藏ではないかと考える。

十七　萬古陶が小向、志氏野陶が四日市となっているところが興味深い。当時の産地の中心はそれぞれ有節の窯と教証の窯という意識があったものと思われる。唯福寺の『海蔵庵窯趾』碑文に慶応年間に窯が廃絶止む無きに至ったときに藤井元七窯に工人が数人移ったということもあり志氏野陶器と藤井元七との関係は全くないわけでないが、生地だけで焼窯を持たない元

七が志氏野陶器を主導していたといえるのか今のところ詳細は不明である。

十八　岡村『萬古の称と印銘について』三重県史研究第二十三号参照

参考文献

明治六年地誌提要材料編　三重県　一八七三

観古図説　蜷川式胤　一八七七

陶器年暦　一八七六

陶磁攷　一八七七

明治十年内国勧業博覧会出品目録　内国勧業博覧会事務局　一八七七

明治十年内国勧業博覧会審査評語　内国勧業博覧会事務局　一八七七

采集陶磁器目録　田中芳男　一八八〇

第二回内国勧業博覧会三重縣出品解説書　三重県　一八八一

第三回内国勧業博覧会三重県出品解説書　三重県　一八九〇

工芸鏡　横井時冬　一八九四

日本陶器目録　E・S・モース　一九〇一

増訂大成陶誌　山高信離　一九一七

日本近世窯業史　塩田力蔵編　大日本窯業協会　一九一七

日本陶瓷史　今泉雄作・小森彦次　雄山閣　一九二五

萬古焼史資料　海藏地区社会教育委員会　一九五三
海藏小誌　海藏小誌編輯委員会　一九五五
原色陶器大辞典　加藤唐九郎編　淡交社　一九七二
萬古　陶芸と歴史と技法　水谷英三　技報堂出版　一九八二
二本松萬古の話　二本松史談会編　一九八三
鳴山萬古―その源流と変遷―　田島町教育委員会編　一九九一
明治期万国博覧会美術品出品目録　東京国立文化財研究所　一九九七
萬古焼、東へ―秋田・二本松・鳴山・足利―　朝日町歴史博物館　二〇一五
朝日町歴史博物館紀要第九号　朝日町　二〇一六

（おかむら　ともいちろう・元四日市市立博物館学芸員）